

*A Midsummer-Night's Dream*の修辞法の使用について

A Usage on the Rhetoric of *A Midsummer-Night's Dream*

西田 義和

NISHIDA, Yoshikazu

英国文芸復興期の頃は英国の国運の非常に隆盛な時代であり、英国国民は愛国の精神に燃えていた。英詩の父と称せられたチョーサーの『カンタベリー物語』等の影響によりようやく文学の世界にも英語が使われるのが珍しくなくなってきた。これにより当時の作家たちは、英語のあらゆる可能性を駆使して、彼らの作品の表現に新しい境地を見出そうとする努力を惜しまなかった。このような時代に、英国において盛んに学ばれた修辞法や修辭学と呼ばれたものが、英国の新しい表現や、語法の創造のために、大きな役割をはたしたのは、当然のことであった。そしてこれらの修辞法を巧みに使いこなして、人々の中に根強くその影響をうえつけたのはシェイクスピアなどを中心とする作家であった。そして特に、シェイクスピアの影響は大なるものがあり、彼の用いた表現の技巧が、現在我々の使用している英語の中にもその生命を持ち続けていることを我々は認めるのである。

今回は『真夏の夜の夢』(*A Midsummer-Night's Dream*) に的を絞り、そこに現れた様々な修辞法を考えてみたい。

1. 補充省略 (Ellipsis)

運動を示す動詞 (come, go, start) は、方向や場所などを示す副詞や副詞句が伴うと省略されることが多い。特に、命令文の場合は副詞が間投詞のように用いられる。このような修辞法を補充省略と呼んでいる。

(1) Then, for the third part of a minute, hence;

Some to kill cankers in the musk-rose buds,
Some war with rere-mice for their leathern wings, (2.2.2 - 4)

(それから、二十秒ばかり、むこうへ行っておいで。

何人かは麝香バラのつぼみにもぐりこんだ毛虫を退治しに、

何人かはコウモリと戦ってその革の翼を剥ぎ取り、)

(2) *Lys.* One turf shall serve as pillow for us both;

One heart, one bed, two bosoms and one troth.

Her. Nay, good Lysander; for my sake, my dear,

Lie further off yet, do not lie so near. (2.2. 41 - 44)

ライ。同じ一つの芝を二人の枕にしよう。
心一つに床一つ、胸は二つでも、真心は一つだから。

ハー。いえいえ、いけません。どうか私の
ためを思って
もっと遠くへ寝てください、そんなに
近く寄ってはいけません。

(3) What though he love your Hermia? Lord,
what though? (2.2. 109)

(彼がハーミアを愛するからといって、それが何でしょう。本当に何でしょう。)

(4) Their sense thus weak, lost with their
fears thus strong,
Made senseless things begin to do them
wrong; (3.2. 27 - 28)

(彼らの感覚はまったく鈍くなり、ひどい
恐怖に度を失って、
無生物までいたずらを始める。)

(5) *Her*: Do you not jest?

Hel. Yes, sooth; and so do you. (3.2. 264 - 265)

ハー。あなた冗談じゃないの。
へり。もちろん冗談さ、そしてあんたもだ。

上記(1)では“hence”は前に“go”を入れ、“Some”と“war”の間に“to”を入れると文法的に正しくなる。いわゆる補充省略である。なお“for the third part of a minute”は「一分の三分の一つまり20秒」の意味である。妖精の世界では皆体が小さいので時間の区分も短いのである。(2)の“One heart, one bed”は“since there is but one heart between us, one bed will serve for us to lie upon.”のことである。また、“two bosoms and one troth”は「胸

は二つでも真心は一つ」という意味で、ここでライサンダーはしきりに添え寝を強調している。(3)の“What though...?”は“What does it matter though...?”のことで、補充省略となっている。また、“he love”は仮定法である。“Lord”は「本当に」の意味で間投詞になっている。(4)の“Their sense thus weak”は「彼らの感覚はまったく鈍くなり」の意味で、“be動詞”を省略している。ここで「人間が“sense”を失い、“senseless things”が動き始めている」ということで、人間と無生物を対照させている。(5)の“Do you not jest?”は“Aren't you joking?”のことであり、また、次の“and so do you.”は“and you also are joking.”となり、補充省略となっている。

2. 首尾反復 (Epanalepsis)

節や文の初めの語を、同一の、または次の節や文の終わりで繰り返す技巧の詞姿のことである。

(1) So sorrow's heaviness doth heavier grow
For debt that bankrupt sleep doth sorrow
owe;
Which now in some slight measure it will
pay,

If for his tender here I make some stay.
(3.2. 84 - 87)

(眠りが破産して悲しみへの負債が拂えなくなると、
悲しみはますますその圧迫を増してくるものだが、
今はその負債を幾分払えるだろう、
ここでしばらく眠気のくるのを待っていいりゃ。)

(2) These vows are Hermia's: will you give

her o'er?

Weigh oath with oath, and you will nothing weigh: (3.2. 130 - 131)

(その誓いはハーミアへの誓いです。あなたはハーミアを棄てるのですか。誓いと誓いとを合わせたら、何も量らぬのとおなじこと。)

(3) Desparage not the faith thou dost not know,

Lest, to thy peril, thou aby it dear.

Look, where thy love comes; yonder is thy dear. (3.2. 174 - 176)

(君の知りもしない人の真情をくさすなよ、命にかかわるような、ひどい目にあうといけないから。そら、あすこへ君の恋人がきた、あれが君のかわいい人だ。)

上記(1)では“sorrow...sorrow”が首尾反復となっている。“For debt that bankrupt sleep doth sorrow owe”とは「悲しいときは睡眠によって頭を休めなければならないのに、それが悲哀に与えねばならない眠りが不足であるため」ということである。“his tender”は“his offer”のことである。すなわち「眠気」を意味する。(2)は“weigh oath with oath, and you will nothing weigh”の“weigh”が首尾反復となっている。この文は「一方の秤り皿にハーミヤへの誓いを、他の秤り皿に私への誓いを載せて量れば、何も量っていない」ことを意味している。なお、“give her o'er”は“desert her”や“abandon her”のことである。(3)は“thy love...thy dear”が首尾反復となっている。なお、“to thy peril”の“to”は結果を表すもので、“to my surprise”の“to”と同じ用法である。

3 . 回帰反復 (Epanodos)

ある語、語句、節などが、間に他の語または語句、節などを挟んで繰り返される技巧。

(1) and she, sweet lady, dotes,

Devoutly dotes, dotes in idolatry,

Upon this spotted and inconstant man.

(1.1. 108 - 110)

(そしてあのかわいい女(ヘリナ)はこの邪な浮気男にあこがれております。熱心に夢中になってあこがれておりません。)

(2) But, Demetrius, come;

And come, Egeus; you shall go with me,

(1.1. 114 - 115)

(しかしデミートリアスよ、来い。

イージーアスも来い。わしと一緒に来てもらおう、)

(3) *Dem.* Tempt not too much the hatred of my spirit,

For I am sick when I do look on thee.

Hel. And I am sick when I look not on you.

(2.1. 211 - 213)

デミ。余計なことをいうと、それこそ本当に憎くなるよ、

何しろあなたの顔を見ると、胸が悪くなるんだから。

ヘリ。私は私で、お顔を見ないと、調子が悪くなるのです。

上記(1)の“dotes...dotes, dotes”が回帰反復である。(2)では“come...come”が回帰反復である。(3)では“I am sick when I do look on...I am sick when I look ...on”が回帰反復となっている。また、“on thee”と“on you”は対比して用いられ、“thee”の方には、

見下げた軽蔑の感情が含まれる。

4．結句反復（Epistrophe）

連続して文尾に同じ語句を反復する技巧。シェイクスピアは他の作品ではこの用法をよく使用しているが、この作品では一例のみ使用しているようです。

O weary night, O long and tedious night,
Abate thy hours! (3.2. 431 - 432)
(ああ憂鬱な夜、ああ永い退屈な夜、
お前の時間をちじめておくれ！)

上記の文においては“...night,...night”が結句反復である。また、“...weary...long...tedious”を修辞学上、類語反復（Tautology）と呼んでもよい。なお、“Abate thy hours”は“Cut short your duration”のことである。

5．畳語法（Epizeuxis）

間に他の語を挟まず、間投詞として同じ語や句や節を反復する技巧。

- (1) Thou, thou, Lysander, thou hast given
her rhymes
And interchanged love-tokens with my
child: (1.1. 28 - 29)
(おいおいライサンダー、お前は娘に歌を
やって、
恋のかたみを交換したな。)
- (2) A calendar, a calendar! look in the alma-
nac;
find out moonshine, find out moonshine.
(3.1. 54 - 55)
(暦だ、暦だ！暦を、調べて、月夜をさがし
た、月夜をさがした。)

- (3) What, will you tear
Impatient answers from my gentle tongue?
Fie, fie! you counterfeit, you puppet, you!
(3.2. 286 - 288)
(この私のやさしい口から、怒った返答を、
無理にもさせようというの。
おやめなさい、おやめなさい！あなたの
嘘つき！人のいうなりになるお人形！)
- (4) And with her personage, her tall person-
age,
Her height, forsooth, she hath prevail'd
with him. (3.2. 292 - 293)
(そしてそのよい姿の、すらりとした身の
丈で、多分男を口説き落としたいんでしょ
うよ。)
- (5) Ho, ho, ho! Coward, why comest thou
not? (3.2. 421)
(ホ、ホ、ホウ！臆病者、なぜ来ないか。)

上記(1)の連続して用いられている間投詞的用法の“Thou, thou”が畳語法である。“thou”は“you”の単数形で、シェイクスピアは相手に怒りや軽蔑を表すとき、または目下の者によく使用している。(2)では“A calendar, a calendar!...find out moonshine, find out moonshine.”は明らかに意識的に畳語法を使用しているように思える。また、“look in the almanac; find out moonshine”は非常に面白い表現で、喜劇の劇的効果を倍増しているのがよくわかる。(3)では“Fie, fie!”というような軽蔑・不快などを表す間投詞を使って、畳語法の効果がよく出ている。(4)では“with her personage... Her height”が畳語法であり、また類語反復も併用している。(5)では登場人物のバックの嘲りの叫び声である“Ho, ho, ho!”の畳

語法の使用である。

6 . 婉曲語法 (Euphemism)

端的で露骨な言い方をせず、当たり障りのない、または、上品な言い方をすること。その起源は一種の禁忌であると考えられる。

(1) Either I mistake your shape and making quite,

Or else you are that shrewd and knavish sprite

Call' d Robin Goodfellow: (2.1. 32 - 34)

(あなたの姿や形をすっかり私が見間違えているのでなかったら、あなたは例の「ロビンの親切者」といういたずら好きな妖精だろう。)

(2) At whose approach, ghosts, wandering here and there,

Troop home to churchyards: damned spirits all,

That in crossways and floods have burial, Already to their wormy beds are gone; (3.2. 381 - 384)

(あれが近づけば、あちらこちらにさまよう幽霊どもは、

ぞろぞろと墓場へ帰ります。四つ辻や川、海の中に、埋まっている、救われない亡霊は、みなすでに、その蛆虫だらけの墓へ帰りました。)

(3) He cannot be heard of. Out of doubt he is transported. (4.2. 4)

(まるで便りがないんだ。たしかにひっそらわれたんだ。)

上記 (1) において、時には好意を示し、

時には悪戯をする妖精を、“Robin Goodfellow” と名づけて婉曲語法を使用している。

(2) では “damned spirits” が婉曲語法である。死刑になった人や、自殺した人は、正規の葬式を受けることを宗教上禁じられた。彼らの死骸は十字路に埋められるのが昔の風習であった。それはすべての行人に踏まれるようにするためである。時には埋められた場所を示すために、杭でその胸を貫いて建てられることもあった。これらの人々の霊は呪われたものとされる。また、水死者は、海や河が当然の墓とされ、埋葬の儀式を受けなかったし、溺死者の霊は呪われたものとして、百年間、宙をさまようと考えられた。(3) の “transported” は「妖精たちにさらわれた」のか、または単に「殺された」ということを露骨ではなく言ったのかははっきりしないが、これも婉曲語法と考えられる。

7 . 虚辞 (Expletive)

単に文法上の形式語として、また修辭的に音律の理由のために用いられたりして、ほとんど、または全く無意味の語句のことをいう。

(1) The king doth keep his revels here to-night:

Take heed the queen come not within his sight; (2.1. 18 - 19)

(王様は今晚ここで宴会を催されるのだが、女王様が王様とぶつからないように気をつけたまえ。)

(2) Because that she as her attendant hath A lovely boy, stolen from an Indian king; (2.1. 21 - 22)

(というのは、女王様がこないだインドの王様から

盗んで来てお小姓にしたかわいい子がいるだろう、)

(3) for that

It is not night when I do see your face,
Therefore I think I am not in the night;
(2.1. 220 - 222)

(私はお顔を見ると、夜が明けるようです、だから夜だという気がしません。)

上記(1)の“doth keep”は“keep”だけでもよい。いわゆる虚辞である。このようにシェイクスピアは“do”を必ずしも強調に使用しているわけではない。(2)では文頭の“Because that”の“that”は不要である。元来疑問詞と思われていた“when”、“why”、“where”などが、関係詞とみなされるようになると共に、“that”を添えてその意味を強めるために付け加えられ、その用法が同様に“because”にも適用されているのである。学者によってはこの“that”を接続附加語と呼んでいる人もいる。(3)の“for that”も(2)と同様である。つまりこの場合“for”は“because”の意味で、やはり“that”は不要で修辞法という虚辞である。

8 . 二詞一意、重言法 (Hendiadys)

二語が、形式上は対等であるが、意味上では主従の関係によって、“and”などによって繋がれているもの。

(1) Night and silence. Who is here? (2.2. 70)

(暗くて静かだ こりゃ誰じゃ。)

(2) Happy is Hermia, wheresoe'er she lies;
For she hath blessed and attractive eyes.
(2.2. 90 - 91)

(ハーミアは幸いだ、どこに寝ているか知らんが、
あの人は美しい魅力のある眼を持っている。)

(3) I will hear that play:
For never anything can be amiss,
When simpleness and duty tender it. (5.1. 81 - 84)

(その芝居を聞いてやろう。
単純誠実な心でくれるものに、
一つとして不都合なものはありません。)

上記の(1)では“Night and silence”が二詞一意、重言法である。また、この修辞法の前に“it is”が省略されているので、補充省略の形もとっている。(2)では“blessed and attractive eyes”が二詞一意、重言法である。ここで結局のところ、ハーミアの「眼」も本当に正しくは見ていなかったことになる。(3)では“simpleness and duty”が二詞一意、重言法である。

9 . 誇張法 (Hyperbole)

事物を実際よりも誇張して印象を強くしようとする事。

(1) The sun was not so true unto day
As he to me: would he have stolen away
From sleeping Hermia? (3.2. 50 - 52)

(まるで太陽が夜明けを間違えないのと同じに、
あの人は私に忠実でした。眠っているハーミアを棄てて
そっと逃げるはずがありませんか。)

(2) Thou coward, art thou bragging to the stars,

Telling the bushes that thou lo'kst for wars,

And wilt not come? Come, recreant; come, thou child; (3.2. 407 - 409)

(臆病者め、貴様は星に向かっていばって
みせて、
さあ決闘しようなどと、茂みに声をかけ、
実は来たくないんだな。さあ臆病者、さ
あ来い、赤ん坊。)

(3) These lily lips,
This cherry nose,
These yellow cowslip cheeks,
Are gone, are gone: (5.1. 337 - 340)

(この白百合の唇と、
この桜色の鼻と、
この黄色いくりんそう色の頬は
もうあの世のもの。)

上記の(1)では“The sun was not so true unto the day As he to me”が誇張法である。夜が明けたら、必ず“sun”が出る。そして“day”になる。だから“sun”は“day”に対して“true”である。それ以上に登場人物のライサンダーも、私(ハーミア)に対して“true”である、と言うのである。(2)では“bragging to the stars”から続いて“look'st for wars”と後の“wars”を強く意識させて誇張法となっている。(3)では“lily lips...cherry nose...yellow cowslip cheeks”が誇張法となっている。つまり“lily lips”ではふつう“lips”は“cherry”にたとえるなど故意におかしくしてコミカルな比喩表現になっている。

10. 反語、皮肉 (Irony)

言葉の意味を裏腹に使用し、表面は賞揚・是認等の意味にもとれても裏面には反対の意

味を含ませる技巧。

(1) You have her father's love, Demetrius;
Let me have Hermia's: do you marry him.
(1.1. 93 - 94)

(君はお父上様に愛されているんだ、ディ
ミートリアス、
ハーミアはおれに任せて、お父上様と結
婚するんだな。)

(2) Durst thou have look'd upon him being
awake,
And hast thou kill'd him sleeping? O brave
touch! (3.2. 69 - 70)

(あなたは彼が眼をさましているときに、
面と向かう勇気がありましたか、だから
眠っているときに殺したんですね。)

(3) A trim exploit, a manly enterprise,
To conjure tears up in a poor maid's eyes
With your derision! none of noble sort
Would so offend a virgin and export
A poor soul's patience, all to make you
sport. (3.2. 157 - 161)

(見事な腕前、男らしい大事業ですね、
嘲弄して、憐れな娘の眼に思わぬ涙を
湧かせるとは！男らしい男は
ただ冗談に、無垢な娘をそんなに怒らせ
たり、
かわいそうな女を、我慢できないほど、い
じめはしないはず。)

(4) Fine, i' faith!
Have you no modesty, no maiden shame,
No touch of bashfulness? (3.2. 284 - 286)

(実にうまい！
あなたは女のつつしみも、娘のはにかみ
も、

きまりが悪いというような心持も、すっかり失ってしまったの。)

(5) Get you gone, you dwarf;
You minimus, of hindering knot-grass made;
You bead, you acorn. (3.2. 327 - 329)

(うせろ、一寸法師め！
みち柳のせいで大きくならなかったちびめ。
南京玉め、どんぐり女め。)

上記(1)の“do you marry him”は疑問文ではなくて、命令文である。二人称の命令文には“do”は不要であるがここでは意味を強めるためとリズムを整えるために反語、皮肉法を使用しているのである。(2)では“Durst thou...awake”に 対 し て“O brave touch”と反語、皮肉法を使用してその効果がよく出ている。(3)では“A trim exploit, a manly enterprise”が反語、皮肉法である。“trim”はこの用法によく使用される。(4)では冒頭の“Fine”が反語、皮肉法である。(5)では“bead”が反語、皮肉法である。この語は次の“acorn”と同様に、ハーミアの小柄なのを嘲った言葉である。

11. 隠喩 (Metaphor)

比喩の一種で、A is as as (or like) Bの形式によらないで、A is Bのごとく直接Bの属性をAに移して叙述することである。これは単に修辭法の一様であるのみならず、極めて広く見られる言語現象である。元来、具体的な事物をさす語が抽象的、比喩的に用いられれば、直ぐに隠喩となる。従って、いわゆる転義なるものは凡てその例となり、この作品の中でも数多く使用されているが、5例のみ紹介する。

(1) But I might see Young Cupid's fiery shaft
Quench'd in the chaste beams of the watery moon,

And the imperial votaress passed on,
In maiden meditation, fancy-free. (2.1. 161 - 164)

(しかも若いキューピッドの燃える矢は、
みずみずしい月の清浄な光に消され、
独身を誓ったその女王は
純な心の思いを恋に乱されずに、そのまま通られた。)

(2) Reason becomes the marshal to my will
And leads me to your eyes, where I o'erlook
Love's stories written in love's richest book.
(2.2, 120 - 122)

(理性が私の意志を指導し、
あなたの眼へ私を連れてきます、そして
そこに
恋の最も豊かな書物に書かれた恋の言葉を
読むのです。)

(3) Or as the heresies that men do leave
Are hated most of those they did deceive,
So thou, my surfeit and my heresy,
Of all be hated, but the most of me! (2.2,
139 - 142)

(また、人の見限った異端邪説は、
それに欺かされた人々が一番嫌うように、
私に飽きられて見限られたお前は、
誰よりも一番私に嫌われるのだよ！)

(4) Could not a worm, an adder, do so much?
An adder did it; for with doubler tongue
Than thine, thou serpent, never adder
stung. (3.2. 71 - 73)

(蛇だって蝮だって、そのくらいのことは
できそうね。)

蝮がやったんだ。だってあんた以上の恐ろしい舌で
蝮が刺したためしはないんですからね、
蛇男さん。)

(5) O, how ripe in show
Thy lips, those kissing cherries, tempting
grow! (3.2. 139 - 140)

(本当にまあ、キスし合うさ
くらんぼのような
あなたの唇は、いかにもよく熟して、摘み
取れといわんばかり！)

上記の(1)の“imperial votaress”が隠喩である。Vestaは古代ローマの炉(hearth)の女神で、その神殿の祭壇にはvestal virgins(ウェスターの処女、4人または6人)によって聖火が絶えることなく燃やし続けられた。こういうわけで“votaress”といったのである。(2)はleaderやguideの意味の“marshal”が隠喩である。“o'erlook”がreadの意味である。また、“love's richest book”で恋人の眼は書物にたとえられる。(3)では“thou, my surfeit and my heresy”が隠喩である。また、“Of all be hated”の“be”は願望を表す命令法である。(4)では“thou serpent”が隠喩である。また、“doubler tongue”は二枚舌以上にもっとずるい舌のことである。(5)では“those kissing cherries”が隠喩である。少し文法的に述べると、“in show”はin appearanceの意味である。また、“tempting grow”の前に“Thy lips”を受けるthatを入れるのが正しい用法である。

これまで英語の表現に見られるいくつかの修辭法を考察してきたが、まだまだ多くの修辭法が残され、説明しつくされなかった多く

の技巧が残されている。しかしながら、わずかではあるが、この小論によって、英語の語法や、表現に対してより多くの関心が寄せられ、英語の修辭法の特質により深い興味もたれるならば、ここでの目的は達せられたといえよう。

参考資料

テキストは*A Midsummer-Night's Dream, the Arden Shakespeare Complete Works* (1988) pp. 889-912より採った。日本語訳はほとんど研究社版の沢村寅次郎訳を使わせていただいた。

池田拓郎『英語文体論』研究社、1992年。

倉橋健『シェイクスピア辞典』東京堂出版、1985年。

大塚高信『シェイクスピアの文法』研究社、1985年。

東田千秋『英文学の言語と文体』三省堂、1957年。

山本忠雄『シェイクスピアの言語と表現』南雲堂、1967年。

石井正之助『夏の夜の夢』(大修館シェイクスピア双書)大修館書店、1987年。